

# 『十二人の怒れる男』と『十二人の優しい日本人』

足 立 節 子

*Twelve Angry Men and Twelve Too Considerate Japanese*

ADACHI Setsuko

## はじめに

本論で取り上げる、ヘンリー・フォンダ主演の『十二人の怒れる男』をご覧になったことのある方は多いかと思う。1998年の夏にリメイク版も出されたこの作品は、今やアメリカ映画の古典の一つといってもよい。はじめて映画化されたのは1957年のことであるが、これが現在にいたるまでアメリカ人を大いに楽しませている娯楽ジャンル、「法廷もの」の火付け役となったという。そして、このシリアスなアメリカ映画は、今をときめく日本のコメディ脚本家、三谷幸喜にも多大な影響を及ぼしているので、本稿では三谷がどのようにこの作品を受容していったのかをみていこうと思うのだが、まずは『十二人怒れる男』のあらすじから紹介していくこととしよう。

## 『十二人の怒れる男』あらすじ

スラム街育ちの少年が、自分の父親をバタフライナイフで刺し殺した容疑で逮捕され、その未成年の息子が裁判にかけられている。その法廷には12人の、少年とは面識も何にもない、法律とも無縁の一般市民が「陪審員」として選ばれ、同席している。この陪審員がタイトルにある12人の男たちというわけである。ちなみに陪審員制は、法律の専門家たちがその知識で判断するのでは、専門馬鹿になって偏ってしまう危険性があるから、一般的な人たちの良識、常識に従って、判断してもらおうというシステムである。

陪審員というのはある日突然、この事件の陪審員に選ばれましたと通達がくるもので、これは市民としての義務だから、断ることは基本的にはできない。仕事も休まなくてはならず、普通の社会生活からは隔離されて、密室に閉じ込められることになる。そのようにして選ばれただろう、この映画の陪審員たちが何をしなくてはならないかということ、少年が有罪であるか、無罪であるかを判断し、有罪ないしは無罪の「評決」を法廷の場に提示することを求められているのである。「評決」は12人全員が一致することが条件である。

この映画の場合、陪審員が「有罪」の評決を出せば、少年は電気椅子に送られる、つまり死刑に処されることになる。そのような重い責任を担わされた陪審員たちが、審議の場で耳にした検察側の話や証人の話は、情況証拠が少年にとって極めて不利な上、少年の弁護人の弁護が今一つ、無罪を主張しているようには聞えなかったという印象を残すもので、そのままでは「有罪」の評決がでるのはまちがいないと思われる状況だった。ところが、いざ陪審員室で評決を出そうとすると、その動向に反して、一人だけ少年の「無罪」を主張する人物がいる。この役をする人がヘンリー・フォンダなのだが、さっさと終わらせて帰りがっている11人を相手に、彼は「話し合おう」と粘り、激しい、長い議論の末、裁判で示された証拠だけでは、やっているかもしれないけれども、絶対やっている、とは言い切れない、やっていない可能性もある、映画の中で用いられる言葉を使えば「正当な疑念」がある、ということをつらやましていく。その結果、他の11人も少年が有罪だと断定できないことを納得し、最終的な評決が、はじめの情勢とはまったく逆の無罪で一致したところで映画は終わる。

### 『十二人の怒れる男』と三谷幸喜

以上のような話なのだが、この作品は人一人の命が12人の人間にかかっており、しかもそれがどんでん返しでもって終わるという、その議論の筋の面白さが観客を飽かせない作品であると同時に、演出者たちをも惹きつけて止まない魅力を持っている。後には舞台化もされているが、レジナルド・ローズの脚本が端的に言って、どのくらい魅力的なのかはアメリカのみならず、初演から半世紀近くたった今日の日本でも日本人の手によって、上演されていることにも示されている。なにしろ、いくら話の筋が面白いとはいえ、日本人にはおよそ馴染みのないアメリカの「陪審員」12人の話を上演しているのであるから、かなりの魅力を備えているといってよい。それどころか、「この芝居をやりたくて今までやってきた、と言ってもいいくらい」と、強い思い入れを語る30代の脚本家まで、日本にはいる。その脚本家こそ、テレビドラマ「古畑任三郎」シリーズや映画『ラヂオの時間』で、笑いの名手として知られ、最近注目を集めている脚本家、三谷幸喜なのだ。彼は、その題も『十二人の優しい日本人』という作品を手掛け、自作解説にこう書いている。

この芝居をやりたくて今までやってきた、と言ってもいいくらい。僕は芝居が嫌いだと言いましたが、唯一「これは面白い」と思ったのが、大学時代にパルコパート3で観た、石坂浩二さんプロデュースの『十二人の怒れる男』なんですよ。映画も観ていたけれど、映画以上に面白かった。

真ん中に舞台があって、客席がそれをぐるりと囲むという形も印象的でした。自分でもこういう芝居がやりたい、とずっと思っていました。

まじめなお芝居なんですけど、大の大人が自分たちとは直接関係ないことで議論して盛り上がるというのが僕にはすごく面白くて、最初は、まったく同じ台本でコメディにしようと思っていたんです。でも、他の劇団がすでに決定版みたいなのをやっていたので、自分なりに新作として作り替えてみたわけです。一幕もので、照明も激しく変わったりしないし、スモークもたかないし、地味な芝居だからどうなるかわからなかったんですが、幕を開けたら、これまでにないくらいお客さんが笑って……<sup>(1)</sup>

当然、『十二人の優しい日本人』は、『十二人の怒れる男』を踏まえて見ると、より一層笑えるしくみとなっているのだが、この芝居は当たり、90年初演のあと、91年再演、92年には再々演を果たし、91年に中原俊監督の手で映画化もされた。まだもてはやされる前の豊川悦司が本映画の中で、いい味を出して陪審員の役を演じている。

三谷の文の中にも、今日の『12人の怒れる男たち』の日本における上演状況が窺われるが、三谷が惹かれているのが、設定場所に移動のない、密室の作品で、とにかく議論の力だけで話が進む点にあることがわかる。別のエッセイでこの作品を「ディスカッションドラマ」と呼んでいることから、それは知れよう。<sup>(2)</sup> ついでに言えば、登場人物が極めて限定された（脚本によっては2・3人増えていることもあるが）、基本的には最初から最後まで同じ12人だけの間のやりとりという点も魅力だったに違いない。三谷は同じように密室劇で登場人物のいたって限定されたコメディ映画、『ラヂオの時間』を鈴木京香主演で作り、成功させているが、これは『十二人の優しい日本人』の延長線上にある作品といってよいのだろうと思う。

そこで、本稿前半で『十二人の怒れる男』がいかに、アメリカの特徴に満ち溢れた作品かを見ていき、後半で『十二人の怒れる男』を『十二人の優しい日本人』（傍点筆者）として新作に作り変えた三谷幸喜が示す、『十二人の怒れる男』とのギャップに焦点を当ててみることにする。

この二つの映画の題を並べて誰しもが思うのは、おそらくなぜ一方は「怒れる」男たち（アメリカ人）で、もう一方は「優しい」日本人なのだろう、という点だ。三谷本人は再々演の際のパンフレットに「確かに「日本人論」としては中途半端だし（ハナからそのつもりで作っていないもので）、「風刺劇」というには毒がない（ハナからそのつもりで作っていないもので）」<sup>(3)</sup>などと、弁明調で書いているが、「優しい日本人」と言われることで、より鮮明に意識される「怒れるアメリカ人」があることは否めない。というわけで『十二人の怒れる男たち』の「怒り」をつぎで見ていくとしよう。脚本が、アメリカでも日本でも、幾種類があるので、ここでは主として映画に用いられたものに基づいて論じていく。

## 『十二人の怒れる男』——アメリカ的な映画

### アメリカのイメージ

『十二人の怒れる男』は、「アメリカ的」な映画である。どんなアメリカの特徴を備えているのか、まず一般論から述べておこう。

日本の人々は、多種多様のイメージをアメリカという国に抱いているが、そうした中に、「強い」国、「正義」の国、「ヒーロー」の国というイメージも含まれていることは、まちがいない。もっとも、ここに挙げたうちの、後の二つはどちらかというと「正義」志向の国、「ヒーロー」志向の国、と言い換えた方が正確かもしれない。とにかく、アメリカという国

を日本人がそのようにイメージする場合というのは、アメリカが自らを「正義の味方」、つまり「ヒーロー」として、行動を展開する側面を見ている。そうした側面は、昨今は特に、国際舞台で「正義の鉄槌を振り下ろして悪を懲らしめる」必要を主張し、実行に移しているアメリカ、しばしば皮肉もこめて、世界における「警察」の役割を果たしていると形容されている行動を起こすアメリカ、から抽出されているのであろう。そして、「強い」国というイメージは、その「強さ」には多少波がうかがえるとはいえ、無論、軍事的な強さを指すのみならず、行動の原動力とまでなっている「正義」への信念・使命感の強さを日本人が見て取っているからなのである。

このアメリカ人に世界警察の役割をとらせる、「正義」に対する強い信念・使命感は、移民国家であり、多文化国家であるという事情を背景に、かなり意識的に育まれてきたものだとしばしば指摘される。これまた、よく言われるように、国内に、国際社会を抱え込んでしまっている移民国・多文化社会においては、「アメリカ人」というアイデンティティーを、共通のイデオロギーをもつことによって形成してきた。すなわち、独立宣言の序章にある、「自由」「平等」「人民」「放任」主義の共有である。これらの「理想」を実社会の中で追求するのが「アメリカ人」たるものの「正義」であり、彼らの「誇り」でもある。「アメリカ人」としてのアイデンティティーは、だから、教育を通して、獲得されるべき、高邁なものなのである。そうすると、国内の国際社会で支持を得た「理想」が、国外の、実際の国際社会でも追求されていくことになるのは、ごく自然の流れというべきであろうか。「正義」が自己アイデンティティーと深く絡みついているのだ。

### 「民主主義、正義、個人の社会に対する責任」

さて、このアメリカ人のアイデンティティーに絡みついた「正義」教育を、『十二人の怒れる男』は行っているのだから、この作品は、はなはだしくアメリカ的な映画なのである。「教育」などという堅苦しいが、映画は前にも行ったようにじつに楽しく、スリルに満ち溢れているので、この映画を見ながら「教育」されているなどとは、よもや誰も思うまい。しかし、アメリカ人であれば、確実にアメリカ人であることのすばらしさを自己確認する結果にはなるのである。それは、とりもなおさず、レジナルド・ローズのアメリカ人としての正義感が、見事に反映した結果なのであろう。ついでに言えば、別に、アメリカ人でなくても、そこに描かれている価値観に共鳴する人は多いはずである。そのなかで、共鳴もできる反面、これは日本人としては「リアル」ではない、ということを感じ取っていたのが、三谷幸喜だと思ふのである。

レジナルド・ローズは、本人が言うように、この映画で「民主主義、正義、個人の社会に対する責任」<sup>(4)</sup>を追求してみせた。具体的にはローズは、まず、アメリカの裁判の特徴としてしばしば引き合いに出される「陪審員制度」を肯定してみせる。裁判で有罪になる気配が濃厚だった少年は、12人の法律の素人がアメリカ市民の責務を果たすことによって、見事に「無

罪」を勝ち取る。ローズは、アメリカ人個人が陪審員として参加する場こそ、まさにそのアメリカの「正義」が試される、理想的な場だ、ということを実証してみせた。「人民の、人民による、人民のための」裁判。人任せにしないで、個人が責任をもって関わっていく、というわけである。ちなみに、この陪審員制度は、個人の自己アイデンティティーの中に社会的「正義追求」が根づいているアメリカ人だからこそ、現在も存続するのであって、かつてはヨーロッパ諸国、日本でも採用されたことがあるが、結局廃止されてしまった制度なのである。

陪審員同士が感情的に口汚く罵り合っている場面で、アメリカに憧れて移住してきた新米アメリカ人である11番の陪審員に、ローズはつぎのように言わせている。

ちょっと。この喧嘩。私たちがここにいるのは、喧嘩するためじゃありませんよ。私たちには責任があるんです。私はいつもこのこと、このことが、つまり、えっと、なんという言葉だっけ。そうそう、通達。私たちが今まで会ったこともない人の有罪、無罪を決めるために郵便で、この場所に集まるよう通達されることが、民主主義のすばらしい点だと思ってました。私たちは評決を出すことによってなんら損も得もしません。これがこの国が強い理由なんです。私的な感情にもつれさせてはいけません。<sup>(5)</sup>

## 「12人」

個人が社会に貢献する責任を持つ、すばらしいアメリカ。それを、ローズは12人の陪審員の成長を通じて描き出したわけだが、彼は、12人の陪審員たちを一見観客と等身大の人間に見せかけながらも、少しばかり色づけすることによって、彼らを普通の人間以上に崇高に描き出すことに成功している。それは日本人観客には気づきにくい点だが、12人の陪審員、怒れる男の「12」に意味があるからなのだ。これはキリストの弟子の数であり、確かに、陪審員の数が12人というのも一般的にあるようだが、じつは、その他の数でも構わず、事実その他の数を採用している州もある。ローズが12という数字を、題にまで用いたのは、やはり意図的なことだったと思うのだが、いかがだろう。

アメリカは意外に信仰心の強い国で、キリスト教徒が圧倒的に多いところである。90年代に入ってから、WWJD (What would Jesus do? イエス・キリストならどうするか) というロゴ入りの製品が、ごく当たり前の顔して流行ったりしている。そんな国であるから、『十二人の怒れる男』*Twelve Angry Men* という題を聞いて、アメリカ人観客がキリストの弟子を連想しないわけがない。しかも、ヘンリー・フォングが扮する、第8陪審員の職業は、“architect”「建築家」である。神の御子であるイエス・キリストは、よく「大工」“carpenter”に擬えられるのだから、この12人が、「神のみぞ知る真実」を、解き明かす聖なる役割を担わされている、と感じても一向におかしくないのである。

こうしたローズの脚色によって、8番の陪審員は、そのヒーローとしての役割における輝きを背景に、みんなを諄々と説いて「正義」を行う道を示し、他の11人はスラム育ちの者に

対する先入観やら、新しくきた移民に対する偏見、私的な悩みや負い目、他の陪審員に対する好き嫌いの感情を乗り越え、公共のために益する者として成長し、全員に公正なる判断を下す清らかな目がもたらされている。

しかも、映画では12人が全一致で、裁かれていた少年は「無罪」になるのだが、はじめに書かれたテレビのシナリオの方では心の中では無罪を納得していたものの、意地になった3番の陪審員があくまで「有罪」を主張する設定になっていたことを考えると、3番が裏切り者のユダという設定になっていたのかもしれない。とにかく、このローズのキリスト教を借りた味付けは、陪審員たちを普通の人間から、普通の人間のようにでいて、じつのところ、ちょっと格好よすぎるかもしれない理想的な人間を観客の心の内に仕立てるのに成功している。ちょうどリアルとアンリアルの境目にある微妙なところに、12人を仕立て上げ、たゆまず成長して、公正さに光り輝くアメリカ人を造りだしたのである。

## 怒 り

自分の作品をはじめて観た五歳の息子の感想が「なんてこった、あいつら滅茶苦茶怒ってたね」<sup>(6)</sup> というものだった、ということのを可笑しそうにローズは書いているが、それこそ「私的な感情にもつれさせ」た怒りは、この作品中のありとあらゆるところに出てくる。だが、『十二人の怒れる男』の中で一番印象に残る怒りは、当然のことながら、「私的な感情」を越えた、偏見や先入観を越えた、事実をみつめた正義が遂行されないことへの8番の陪審員の「崇高な」怒りである。

8番の陪審員に秘められている「怒り」は、正義のためには戦いを辞さないという、芯の強さにつながっており、それこそがアメリカ人をして自分個人のアイデンティティーとして獲得すべきものとし映る点だし、日本人の目にも、多くの場合もっともな価値観として映っている。ただし、それを信念として実践するとなると、どうやらアメリカ人は行動に移せるが、よくよく考えると日本人の多くには、必ずしもこの信念に沿った「戦いを辞さない」という芯の強い「怒り」は湧いてこないのではないのか。三谷幸喜の『十二人の優しい日本人』でそこを鋭く衝いている。

## 『十二人の優しい日本人』

### あらすじ

まず、はじめに、『十二人の優しい日本人』のあらすじを紹介しよう。

日本にも陪審員制度があるという設定で、12人の日本人が、陪審員として招集され、陪審員室に閉じ込められている。ちなみに、1957年に作られている『十二人の怒れる男』は、裁かれている張本人のスラム街育ちの少年も白人ならば、12人の陪審員も全員白人で、しかも全員男という、差別意識の強くなった今のアメリカでは考えにくいキャスティングとなって

いる。それに対して、『十二人の優しい日本人』は、さすがに現代のものらしく、陪審員のなかには女性が2人ほど含まれている上、彼らが扱う事件もより現代的なものに変えられている。その事件とは、一人の男がトラックに轢かれて死亡した事件なのだが、陪審員たちは、男がトラックに轢かれたのは、元妻である若い女性が故意に彼をトラックに向かって突き飛ばしたためか、それとも偶発的なものだったのかについて、判断を下すべく召集されているのである。そして、やはり『十二人の怒れる男』同様、この女性が「有罪」か「無罪」かについて、全員一致した評決を出すことを求められている。

さて、『十二人の怒れる男』の時は、11人が有罪を主張する中、一人だけ「無罪」を主張して話がはじまったが、『十二人の優しい日本人』では、決を採るといきなり全員一致で無罪という結果をみるところからはじまる。このままでは映画は展開しないわけだが、自分も無罪に挙げたくせに、「本当はみなさん、彼女が殺っていると思っているんじゃないませんか」と言い出す変わり者、11番の陪審員の一言によって、議論、あるいは話し合いらしきものが引き起こされ、さまざまな人間模様が展開される。こうしてなんとか「有罪」の可能性を、曲がりなりにも探っていき、事実を整理し検討し直した結果、やはり「無罪」だということと一致した評決が出され、『十二人の優しい日本人』は終わるのである。

### 「自分たちとは直接関係ないこと」と「正義」

以上でみたように、『十二人の優しい日本人』は、基本的には『十二人の怒れる男』と同じ状況設定になっている。だから、どんなに三谷幸喜が、自分は「真ん中に舞台があって、客席がそれをぐるりと囲むという形」や「ディスカッションドラマ」という形式に惹かれたのであって、日本人論とか、風刺劇といった、より大きな「文化」をテーマとして扱った作品を作ろうとしたのではないと、弁明したところで、『十二人の怒れる男』を見たことのある観客からすれば、この作品が日米両国の培う対人関係や価値観、理想といった文化的な違いを巧みに用いて楽しませてくれることに違いはなく、虚しい弁明に響いてしまう。三谷が試みたことは、基本的には登場人物のみを日本人に変え、日本人だったらばどのように話が進んでいくかということを作品化することだったわけで、作り変える過程で顕わになるのは、自然、『十二人の怒れる男』が示すアメリカの理想に対する日本人の反応なのである。

日本人である三谷幸喜が、『十二人の怒れる男』を見て、「大の大人が自分たちとは直接関係ないことで議論して盛り上がる」ことを「面白く」感じたことは、すでに引用したが、これがそもそも、両作品を比べる上で、ひいてはローズ描くアメリカの「正義」を考えるにあたっての鋭い指摘なのだ。ローズは、新米アメリカ人の陪審員の口を借りて、なんら自分に利益のない、赤の他人の事柄（正義）について、個人個人が責任を持つ、というのが「民主主義」のすばらしいところ、だと言わせているが、日本人である三谷はそれを「面白い」と言うことで、『十二人の怒れる男』が魅力たっぷりに描き出してみせる価値観に取り込まれなかったのである。

このことは、周囲の思惑に反した議論の口火を切る、『十二人の怒れる男』における8番の陪審員と『十二人の優しい日本人』の11番の陪審員を比べてみればよくわかる。『十二人の怒れる男』における8番の陪審員は、犯人とされる赤の他人である少年が、公正な判断を下されるためには、自分の時間を惜しまずに費やす、社会的責任感の強い、行動的な人間で、彼をアメリカの理想的人物として、ローズは観客に提供し、多くの観客はその8番の人物に魅了されたのである。

ところが、三谷は登場人物を日本人に変えたとき、これらのローズが追及した、提示した価値観をすべて削ぎ落としてしまう。『十二人の怒れる男』では、8番の陪審員が、あまりにも安易に少年を「有罪」にしようとする人々に対して、「正義への怒り」を胸に秘めながら、「私は、ただ話し合いたいだけだ」「I just want to talk」と切り出した。『十二人の優しい日本人』の11番の陪審員も、やはり「僕、話し合いたいんです。話し合いをしましょう、みなさん」と、同じように切り出す。だが、ローズの8番の陪審員が抗議の意味をこめて、ほかの人と反対の票を投じたのと異なって、三谷の11番の陪審員は、誰か別の人が「有罪」に挙げてくれないかなと期待していたのに、誰も挙げてくれなかったから、慌てて「ごめんなさい」とあやまって、「有罪」に自分の票を変えてしまうという、およそ、ローズ描く8番の陪審員のような自分の信念に従って行動する正義漢とは異なる人物なのだ。しかも、「正義への怒り」など、どこにもない。これは映画の最後の方でわかる仕組みとなっているのだが、彼はじつは何がなんでも元妻を「有罪」にしたい。というのも、自分が妻に捨てられた11番の陪審員は、その個人的な妻への恨みを、この事件の女性にも投影させているのだ。だから、妻に捨てられたトラックの運転手のことが、他人事ではない、という設定で、彼の行動はあくまでも私的な恨みに起因している設定となっている。一見、事件の真相究明に対する熱意は、11番の陪審員のものと8番の陪審員のものと同様に見えるが、じつは正反対の性質のものに変えられてしまっているのである。

そのことを裏付けるかのように、『十二人の優しい日本人』には、ヒーローが登場しない。『十二人の怒れる男』のヒーローが担うストーリー展開の役を、『十二人の優しい日本人』では、他の11人と相反した議論を展開して、説得していく役の11番と、弱者が口を開くのに手を差し伸べて、11番の陪審員を不利に持ち込んで行く役の3番とに分けてしまっている。3番の陪審員が、敢えて言えば、『十二人の優しい日本人』の中で一番、カッコいい人物として描かれている。<sup>(7)</sup> 『十二人の怒れる男』における8番の陪審員は、職業が「建築家」ということになっているが、彼は有能な弁護士がつくことなく、法廷に立っている少年の弁護をしているようにも取れ、ある意味で「弁護士」への憧れをそそり立てるような役回りになっているといってもよい。豊川悦司が演じる3番の陪審員が『十二人の優しい日本人』のなかで、「僕は弁護士なんですよ」と言っているのは、三谷の眼にもそう映ったことの証明だろう。<sup>(8)</sup> だが、その弁護士も偽者なのであり、ヒーローにはなりきらず、単に権威に弱い日本人という側面に光を浴びせる役しか果たしていない。



## 「笑い」

こうして、三谷はローズが追求した主題を、日本人に当てはめることをせず、正義という枠を外してしまった。ついでに、付け加えておくと、この主題の排除は、『十二人の怒れる男』で「12」という数字や、「建築家」といった職業が、陪審員たちにある種の神聖さを与えて、観客、特にアメリカ人の観客に対して多大な心理的効果を上げたのに反して、『十二人の優しい日本人』では、なんら意味を持たない数字と化す結果を生んだ。結果、正義のための「怒り」は姿を消してしまい、「怒れる男」は「優しい日本人」とキーワードを変えることになるのである。そうすると、当然、正義のための怒りが抜け落ちた人々の間での話し合いが、どのように展開されるのか、が見所となってくることとなる。そして、そこに三谷がもたらししたのは、彼が得意とする「笑い」であった。『十二人の怒れる男』が、笑いとははなはだしく無縁の、シリアスそのものの映画であるだけに、この落差がもたらす衝撃は大きい。

例として、すでに触れた映画の冒頭の場面を挙げておこう。『十二人の怒れる男』を見たことのある人にとって、『十二人の優しい日本人』の冒頭で全員が「無罪」に挙手しているシーンは、すでに笑いの種なのである。観客は、『十二人の怒れる男』の同じ個所で、事実解明のために8番の陪審員が燃やす正義遂行のための「怒り」の大きさ、しかもそれが非常に尊く描かれていたことを、念頭におきながらその場面を見るのだが、『十二人の優しい日本人』では、その採決の場を支配しているのは、「さあ、早く帰ろう。無罪なら元妻の女性にとってだって悪くない、みんながいやな思いをせずに済む」という気持ちである。しかも、「本当は彼女殺っちゃっているんですよ」なんていう台詞が飛び出て、露骨に事実の究明とか、正義への怒りは二の次になっていることが顕わにされる。また、日本人である観客は、本当に彼女が殺ったかどうかより、円く治める方が大事っていう場の雰囲気や、「知っている、知っている」、「わかる、わかる」、などと思っていたりする。

そうした、多くの日本人が社会生活をおくる術として習得した知恵が、誇張気味にスクリーン上で展開されたとき、観客は『十二人の怒れる男』の同じ場面のシリアスな展開を思い起こして、そのギャップに笑い出すことになる。そして日本人観客は、現代の多くの日本人にとって、8番の陪審員のような人物への憧れを共感も理解もできるが、それを実社会のなかで、自分たち個人個人が最優先事項として体現すべきものと必ずしも考えていない点をも、この笑いを通して気づかされるのである。

『十二人の優しい日本人』を見ている間中、このような笑いが連発されることになるのだが、この「笑い」のプレゼンテーションの仕方は、注目に値する。無論、『十二人の怒れる男』を観たことがなくて、『十二人優しい日本人』を観る人もいるはずで、その人たちでも十分に笑える（少なくとも、舞台の方では三谷の心配を他所に観客は「これまでにないくらいお客さんが笑っ」たのであった）。それは、ローズがごくシリアスな方向に、登場人物の性格の型を、いそうもない人間にならない程度に誇張したのに対して、三谷が登場人物の性

格の型を、大げさに面白おかしい方向に誇張したからに相違ない。

ただし、注目に値するのはこうした人たちの「笑い」の方ではない。というのは、『十二人の怒れる男』を念頭において見ている者と、そうでない者の笑いの間には、おそらく笑いの「質」が異なるからである。三谷は、両映画のズレを観客自身に「検討」させることで、笑いを引き出している。要するに、観客は、『十二人の優しい日本人』だけを観て笑っている、いわば単に笑わされている観客とは異なって、自分たちの知的操作を経て「笑っている」からである。こうして観客が生み出す、自発的な「笑い」は、両者の「ズレ」「差異」についての指摘を含んだ笑いで、意外に新鮮に思えるのである。この「違い」を認識した笑いは、主張が変わっていく可能性を秘めた笑いであり、ごく限られた人たちの間の感覚的な笑いの域を超えた、より通用度の高い笑いとなっているのである。

### 「優しい」日本人

それでは、『十二人の優しい日本人』で観客が常に検討させられ点は『十二人の怒れる男』のどの点なのか、といえは笑いを生み出している鍵、タイトルにまでなっている「優しさ」と「怒り」の対比である。

『十二人の優しい日本人』の中で描かれる「優しさ」は、“gentle” “kind”と直訳されるが、これらはここの「優しい」を的確に表現しているとは言えず、どちらかといえば「思いやり」の意味が濃い“considerate”、あるいはもう少し「優柔不断」という「優しさ」を意味する、少々口語的な表現ではあるが“wishy-washy”をあてる方が適切である。

観客がこの映画に見出す「優しさ」は、「本当は、彼女が殺しているかもしれない」と内心思いつつも、元妻である女性がひどい夫と別れたく思ったのは当然だ、彼女は可哀相だと感じ、同情を優先する「優しさ」、具体的事実究明という正義は二の次にする「優しさ」である。容易に、あるいは安易に、元妻を許容する「優しさ」である。あるいは、決を採っているときのその場面に見られる、「みんながいやな思いをせず済む」という「配慮」、すなわち「思いやり」という「優しさ」である。または、大勢の意向に従いたい、という優柔不断さである。

この「許容」－「優しさ」を行動原理としている「優しい日本人」の集団に、石を投じるのはすでに見たように、それを私的な事情で「どうしても許せない」11番の陪審員だったわけで、ある価値観を奉ずる個人の強い良心から生ずる怒りとは無縁であった。そして、彼が元妻を許容できないことに対する他の11人の態度は、「信じられない、この人」というもので、許容できないことに対しては、かなり冷たい仕打ちが飛ぶことも『十二人の優しい日本人』にはよく示されている。さらに、この集団が「許容」するかしないか、といった基準が、はなはだしく集団の共通感覚に頼ったもので、理屈ではないことも、また、明らかにしている。というのは、11番は理屈ではなく、「ごめんなさい」を連発して、とりあえずまあ仕方がないか、という気分をほかの11人から引き出すのに成功しているのだ。これは、11番が

他の11人の彼に対する感覚的許容力に頼っている以外のなにものでもない。

そして、はじめた話し合いらしきものが、これまた話し合いというにはあまりにもお粗末な状況を呈する。なにしろ「無罪」と主張する側は、「なぜ無罪に挙手したのですか」、と聞かれると、「理由はない、ただ彼女は悪い人には見えなかった」という、恐ろしく感覚頼みの、理性的でないことを言う。そういう相手に、「有罪」の可能性を示していく作業が始まる。「こうこうこうだから、有罪の可能性はある」と「主張」して「議論」しようとすると、「彼女が犯人に見えるなんて、あなたの「心」、曲がっています」などと、言われてしまい、「話し合い」にならない様子が、面白おかしくつぎつぎと描かれていく。しかも、理屈をごちゃごちゃこねる人間より、心がどうのこうのといった、事実を離れた感覚的な話をする人の方が、どこか尊重されていることまで、巧みに描写されている。

『十二人の怒れる男』の陪審員たちが、互いに対する言葉での説得を尊重するのに対し、『十二人の優しい日本人』では「能弁」は必ずしも尊重されない。その証拠に自分の気持ちや感じていることを、言葉に言い表す訓練がされていない、自分の発言に自信を持った態度のとれない人間の感覚的な部分をも汲み上げようとする人（3番の陪審員）のほうが、人格的に優れた人として描き出されるのである。こうした人格的に優れた人というのは、人を傷つけないことに長けている人として演出されているのだが、ここにはこれまた、個人の強さに信を抱く『十二人の怒れる男』と、個人の弱さを自明としている『十二人の優しい日本人』との対比があるといえよう。

こうして、見ていくと「優柔不断」という言葉には、否定的な響きが強いが、そこに「優柔不断」を避けて「優しい」という言葉を用いたところが、三谷のうまいところであることがわかる。三谷は、この映画の中では少なくとも、優柔不断であることを、否定していない。事実、「故意に元妻は男をトラックの前に押し出した」ことを知的に証明してみせようとする11番と、その他のどちらの結末でも許容しそうな、優しい人間たちとの戦いとなり、「優しい」人たち側の勝利で終わるのだ。

## 結 び

以上でみてきたように、『十二人の怒れる男』を観ている時、8番の陪審員が示す「正義感」を日本人観客は充分理解する。8番の陪審員に共感を覚える人も多い。だが、自分たちが、当事者になった時、はたして8番の陪審員の「正義感」に賛同できるか、三谷の答えは、できないというものだった。個人の感情を超えたところで、絶対的基準としてしたがうべき、客観的な善悪観の存在に対する認識が、日本人は甘い、という見解である。そして、8番の陪審員がほとんど使命感として抱いている「正義」への「怒り」が、第一義的なものとして日本人の間に根づいていないことを、三谷は濃厚な笑いにして示していた。その三谷の笑いは、どうやら、「直接関係ない」事柄・人との関わりにおける、「文化差」とでもいうべき

ものを核に持っている。言い換えれば、他者との関わりにおいて、価値基準を一元化しようとする「怒れる」人たちと、それに拘らないでおこうとする「優しい人」たちのズレが核に置かれている笑いだと思うのである。そして、「優しい日本人」たちは、「怒れるアメリカ人」を良しと、許容するだろうが、逆、「怒れるアメリカ人」は「優しい日本人」を良しとするだろうか。無理であろう。ここには今日も日米が直面している文化「摩擦」がある。こうした「文化摩擦」を見つめていく訓練をしておかないと、コミュニケーションがとれなくなり、自分たちの存在が危うくなってしまうわけだが、そうした意味合いにおいても、三谷脚本が笑いという形でスクリーン上に育んだメッセージは、注目に値するのである。

### 註

- (1) 三谷幸喜『Now and Then 三谷幸喜』角川書店、1997年、63～64ページ。
- (2) 三谷幸喜『オンリー・ミー』幻冬社、1997年、317ページ。
- (3) 三谷幸喜『オンリー・ミー』幻冬社、1997年、274ページ。
- (4) “Author’s Commentary,” Reginald Rose, *Six Television Plays*, Simon & Schuster, 1956. *Twelve Angry Men*, 開文社、1995年所収、44ページ、足立訳。
- (5) *Twelve Angry Men*, 英宝社、1997年、90ページ。
- (6) “Author’s Commentary,” Reginald Rose, *Six Television Plays*, Simon & Schuster, 1956. *Twelve Angry Men*, 開文社、1995年所収、45ページ、足立訳。
- (7) 蛇足だが、3番の陪審員を演じているのは豊川悦司で、彼はこの作品でテレビ界からも注目されるようになったらしい。
- (8) もっとも、私個人は、この演出はあまりよいとは思わない。確かに、そもそも『十二人の怒れる男』が、映画内では、あくまでも職業による人間の格付けを否定し、対等の立場に置く「民主主義的」設定に徹しているのに対し、この弁護士の導入は、職業的地位による発言権の強弱、弁護士という権威、あるいは肩書きに「弱い」という日本人の側面は導き出す効果を發揮している。だが、弁護士を陪審員の中に登場させたのは、この映画の、陪審員が法律とは無縁の素人で、その人たちの責任感と善悪に対する良識において、正義への責任を果たすといった特性からすると、いささか面白くなさすぎるように感じられるからである。三谷自身それを感じていて、最後で「実は役者なんです。前に弁護士の役を演じたことがあって」と、落ちをつけさせて収拾しようとしてはいるが、あまり成功していないように思う。

(本学専任講師)